令和5年度組織目標 知事協議概要

部　局　名	農政水産部
日　　時	令和５年(2023年)４月26日（水）　14:22～14:53
場　　所	特別会議室
出　席　者	知事、江島副知事、大杉副知事、知事公室長、総合企画部長、総務部長、総務部管理監 部長、理事（近江牛流通担当）、次長、技監（みらいの農業振興課長事務取扱・みらいの農業振興課みどりの食料戦略室長事務取扱）、技監（畜産課長事務取扱）、農政課長、水産課長、耕地課長、農村振興課長、農業団体指導検査室長、地域農業戦略室長、食のブランド推進室長、近江牛流通対策室長、水産課主席参事、農業基盤管理推進室長、地域資源活用推進室長

発言者	発言概要
大杉副知事	農林水産省では「琵琶湖システム」は非常に「世界農業遺産」の特徴を説明しやすい取組として認識されておられることから、観光部局、教育部局など他部局と連携しながら推進していただけることを期待している。 また、これまでのアカデミックな裏付けも持ちながら進めていくのも良いのでないか。
江島副知事	農業、漁業、畜産業の何れの業態も経営が厳しい状況。農畜水産業のお金に換えられない価値を増やすことは大切と思うが、所得を増やすということも大切かと思う。所得を増やす、業態を大きくする、県の経済の中に一次産業を高めるというイメージをする中で、農業、漁業、畜産業の切り札、戦略について強い思いを聞かせていただきたい。
耕地課長	今後、人口減少、高齢化等によって担い手が減少していく中で、農業を強くし、儲かる農業とするには、圃場整備と言われる農地の基盤整備を推進していくことが重要。 大区画化した圃場整備を行い、担い手に農地を集積していかなければ、今後、離農した農家の農地を受け入れて担い手の大規模化が進むことも想定される中、効率的な農業ができないと考えている。 高収益作物（果樹や野菜などの園芸作物）の生産に向けた基盤整備に投資を行うことが、農業の競争力強化と農業者の収益向上に資すると考えている。農地の基盤整備によって色々な作物が作れる農地を準備していくことに注力していきたい。
技監（みらいの農業振興課長事務取扱・みらいの農業振興課みどりの食料戦略室長事務取扱）	本県では、これまで米からの転換作物として麦・大豆を作ってきた。その生産ノウハウは滋賀県の強みです。その強みを活かし、小豆や加工用タマネギ、キャベツ等の高収益作物を水田に導入し、最善の農地利用のもとでベストミックスさせながら収益性を高めていくことが、儲かる水田農業への一つの道筋と考えている。このような議論と実践を現場の方々と共に進めていきたいと考えている。
水産課長	令和３年度からの10年後を見据えて、漁業者の水揚高、収入１千万円を目標とし「滋賀の水産業強靭化プラン」に取り組んでいるところであり今年度が３年目。 儲かる漁業の実現に向けては流通が大事であり、それと併せて、魚が居る状態をつくる資源管理を着実に進めていくことが重要。その切り札としては、指導力をしっかり発揮できる漁業組織の存在が必要不可欠と考えており、漁業者の方々が目標としている今年度中に、県内漁協の合併によって力強い漁業組織を作っていきたい。
技監（畜産課長事務取扱）	令和３年度には「近江牛ブランド振興基本方針」を策定し、さらなるブランド振興への取組を進めている。今年度は近江商人の「三方よし」の精神のように「三方よしの近江牛生産」を重点的に進めていきたいと考えており、具体的には、「アニマルウエルフェア」、「安全・安心」、「耕畜連携」への取組をいかに消費者までつないでいくかということを支援していきたい。
江島副知事	従来のやり方を超えて何かをやらないと、多分、打破できないと感じている。何か一歩踏み出して頂かないと、なかなか、そう簡単に良くはならないだろうとも感じているので、その辺りを検討して頂きたい。 また、若手の職員の知恵を借りながら、議論も交え、その発想にも触れていただければと思う。

発言者	発言概要
知事	所得をあげようと思えば、たくさん売れる、高く売れる、より安く作れる、または、より良い物を作って高く売れることが必要かと思う。 幾つかヒントになるキーワードがあるのではと思う。 一つ目は「徹底したスマート化」。「カン」に頼らないと魚がどこに居るかわからないとか、牛を実際に触って初めて状態か分かるとかじゃない「徹底したスマート化」。 二つ目は「ブランド化」。世界農業遺産「琵琶湖システム」をフル活用し、例えば、２割価格アップとか、価格を上げるために、もしくは滋賀の農業に携わる人を増やすために、滋賀のものを買ってくれる人を増やすために世界農業遺産を使うということを徹底的に打ち出そう。 三つ目は「グローバル化」。国内マーケットだけではなく、海外にも目を向けよう。だから、滋賀の持っているものをどう打ち出せるかという「輸出戦略」をもう一度。 あとは、「多角化、集約化」。例えば、イチゴの新品種「みおしずく」の産地クラスター。広域で分散して色々な取組を個別にするよりは、例えば、産地クラスターを北部で作るなどある。また、JAをはじめとして関係団体との連携も重要。 それを世界農業遺産と絡めて３年なら３年、５年なら５年、これで進めていこうという旗を掲げ、所得なども絡めてやってみると、皆が希望を持てるのではないかと思う。
農政課長	「世界農業遺産」のそのものの知名度が低いので、国などにも働きかけ一般の方に刺さるようなコンテンツになっていけばと考えている。 例えば、オーガニックは、価格がある程度 高くても買われる消費者の方がおられるので、世界農業遺産もそういうブランド化は出来るのではないかと思っており、上手く形に出来ればと考えている。
知事	「滋賀の農業違うな、琵琶湖を預かっておられるし、『琵琶湖システム』で世界農業遺産の認定も受けられたし、ちょっと違うな、作り方も売り方も…」という取組をしてみよう。 例えば、イチゴのパックや米・肥料の袋を再生プラスチックにしていくとか、日本を代表するモノ作り県である「滋賀のモノ作り産業」と「農業、畜産、水産業」の課題を結び付けて、解決策を作ってはどうか。 滋賀県の農業は、これだけ工場、企業があるからやっぱり違うなというように作りたい。畜産業のアニマルウエルフェア、水産業の資源管理プラス養殖、獲れる時に獲れるものをも良いけれども、やはり醒ヶ井養鱒場が培ってきた技術を何か活かす取組を考えてみよう。
食のブランド推進室長	お茶については、これまでオーガニックを推進してきた。現在は、グローバル化に対応し、海外も視野に入れた取組を進めている。さらに今年度からは、消費者ニーズの高まりを見据えて「低カフェイン、カフェインレス」の滋賀県オリジナルの茶を農業技術振興センター茶業指導所の方で開発したい。 その商品を海外のマーケットを中心にしっかりと展開して、お茶農家の所得向上、ひいては、滋賀県民にとってはそういうものがあるという「幸せ」を実現していきたい。
知事	健康にどれだけ良いかということを数値化、データ化、見える化して発信していけると良い。
食のブランド推進室長	世界農業遺産と絡めて、しっかりと発信できれば、お茶の価値、近江の茶の価値がしっかりと上がっていって、高付加価値化につながっていくのではないかと考えている。
知事	最後に２つだけ言うと、業務の見直しをお願いする。 それぞれの部局で、一つは手続き、申請の電子化、そして、会議の見直し、さらには、それぞれで作成されている冊子を電子化するといったこと。 さらに、ＣＯ２ネットゼロの主力は、これから農政水産部になってくると思う。牛のゲップ、カーボンファーミングなどを始めよう。また、「やまの健康」と絡んだ中山間地域は、県内の主体だけではなく下流の大学・企業と、折角、関西広域連合があるのだから、何かそういう仕掛けも出来れば面白いのではないかなと思う。
農村振興課長	中山間地域の振興につきましては、出来るだけ多様な主体と幅広く連携を図っていきたい。
知事	農水部の皆さんは、有機的につながっており、一番まとまりのある部であり、団結力のある部。 美味しいものを作る力、食べるものを作る力は、かけがえのない力。 滋賀県では、食べるものを作る力が大切。しかし、耕す物がない、耕す人はいないということが無いように、是非、頑張っていこう。